

高知県の念仏系芸能の足の所作

高知大学 山田 敦子

研究目的

舞（旋回運動）と、踊（跳躍運動）が区別されているわが国の舞踊における「踊」の跳躍運動とはどのようなものであろうか？大地から離れ、天空に伸び上がろうとする跳躍を行う欧米のダンスを専門領域としてきた筆者にとって素朴な疑問であった。高知県の「〇〇踊り」と称される民俗芸能を採集し始め、その足の所作の共通性を見出そうと摸索していた折、「中国の苗族の儺堂戯の禹歩と反閤」¹⁾に出会い、この足の所作を手懸りにすれば共通性を見出せるのではないかという仮説を得た。そこで、本論では、儺堂戯の禹歩と反閤の足の所作を分類基準として、高知県の念仏系芸能の足の所作を分析、比較考察することによって、それらの共通性を明らかにし、「踊」の跳躍運動について考究を進めようとするものである。

研究方法

儺堂戯の禹歩と反閤の足の所作を以下の3種類の分類基準とし、高知県の念仏系芸能の収録VTRフィルムを分析し、その足の所作を比較考察する。

禹歩 A：左足、右足、左足と三歩歩く。

B：両足を揃えて膝を屈伸する。

反閤 C：片足を軸足の前で交差させる。

研究対象

高知県の念仏系芸能：〈大念仏踊り〉3（1）、〈花取踊り・太刀踊り〉22（16）、〈こおどり系芸能〉6（5）、〈田楽躍系〉1（1）、合計32（23）

（）の数字は筆者が実際に取材したもので、芸能の名称・所在地、及び分析結果資料は発表時配布

研究結果及び考察

（1）分類基準Aの足の所作を行う芸能は9種類であった。南無阿弥陀仏の4拍を基本のリズムパターンとするので、三歩歩いて、4拍目を静止する。禹歩が前後の歩き方であるのに対して今回対象とした芸能では左右への歩き方であった。三歩歩いた後、静止するのではなくCの足を交差させる所作（A+C）を行う踊りは11種類あった。この足の所作を「地足」と呼ぶ踊りが2種類あった。分類基準のAとCの組み合わせ（すなわち、禹歩と反閤の組み合わせともいうことが出来るのではないかと考える）の足の所作が「花取踊り」、「こおどり系芸能」に共通にみられる基本的な足の所作

と捉えることの出来るものである。演目が異なっても、動き方が変わるののは上半身の採物の扱い方が変わるだけであり、足の所作は、基本的な足の所作の変化したものであった。

（2）分類基準Bの足の所作は、前後に出す足（B1）、左右に出す足（B2）、上に上げる足（B3）に分類できた。B1：6、B2：6、B3：2の計12種類（一つの踊りに2種類あるものがあった）。この足は演目の始まりや、演目をつなぐ箇所で踏まれている。

（3）分類基準Cの足の所作は、念仏系芸能のどの系統にも見られ、さらに踊り手だけでなく、太鼓・鉦打ちや、音頭も行う足であった。交差した足が大地についたままのもの（C1：8）、から足が大地を離れ（C2：6）、そして軸足も大地を離れ、跳ぶ（C3：5）までの3段階に変化した形で見出すことが出来た。「跳ぶ、跳ねる」と言われる、「踊」の原初的な足の所作ではないかとも考えられる。

まとめ

本論で対象とした高知県の念仏系芸能に見られる足の所作は、儺堂戯の禹歩と反閤に共通する、二本の足が作り上げる、極めて原初的な足の所作で成り立っており、さらにそれは、「踊」の跳躍運動のうまれてくる経過を暗示するものとして捉えることもできるものでもあった。

それぞれの踊りは、伝承の時期が不明のものが多いのであるが、1614年伝承の記録の現存する伊勢踊りや、1793年の文献が残っており、柳田國男が「足利時代に成れりとおぼし」²⁾と指摘した田楽躍系の芸能とも共通する足の所作を持っていた。これらの足は、中世に渡来してきた儺戯系統³⁾の足の所作と共通性を持つとも想像される。さらに、934年に記述された土佐日記に見られる饞の修跋の儀式の中で行われていた足の所作にも通ずるのかもしれない。身体から身体へと伝承される「踊」は、伝承保存の困難な中でも、これだけはしなければ成らないと言う所作が残されてきたのではないだろうか。「祈る足」とも呼びたくなるものである。

今回研究対象とした念仏系芸能は採物を持った芸能であるが、採物を持たない手踊りの系統である盆踊りの足の所作はどのようなものであろうか。さらに、奉納の仕方による所作の違い、地域の関連性、伝承の経路等など、今後に残された問題は多くある。

本研究に対して多大なご協力を下さった各保存会の皆様及び井出幸男氏（高知大学）に深い感謝を捧げます。

注

- 1) 伎楽再現（1999、11、7、NHK TV放映）
- 2) 高木啓夫「土佐の芸能」高知市文化振興事業団
- 3) 諏訪春雄「日本の祭りと芸能」吉川弘文館